学位（博士）論文要旨

ファッションの概念変化と ポスト・ファッションの可能性

ストリートファッションに関する実証研究を事例として

渡 辺 明日香

【論文内容の要旨】

本論の目的は，戦後60年間における〈ファッション〉の概念変化と，そのメカニズムの変容を究明することにある．これまでファッションに関する研究は，服装史やデザイナーの作品研究，民族学・民俗学による衣生活研究，構成学，素材研究等が中心に据えられ，現在進行するファッションそのものを研究対象とすることは比較的軽視されてきた．1920年代に今和次郎により提唱された「考現学」や1970年代以降に試みられてきたマーケティング対象としての論考等をのぞいては，研究成果は極めて少ない状況にある．

筆者は，上述の考現学や定点観測等に深い関心を持ち，1994年より東京都内の若者を中心とするストリートファッションのフィールドワークを実施し，実証研究と資料研究の双方を進めてきた．研究過程において，ファッションの概念が，多様な意味内容を含みながら変容している点に着目し，これを考察対象とした．

本論文では，1．既存のファッション論の整理検討　2．流行概念の整理と変遷　3．ファッションに関するエスノグラフィーの既存研究の整理 を行った上，以下の内容を考察した．

1．ファッションの構成要因―若者の装い，メディア，産業システム，ファッションの変遷，ファッション・ストリートの変化など―の諸点から歴史的な変遷の整理・分析を行なった．

2．1990 年代以後のファッションの構成因子の複層的，重層的な位相を筆者の実証研究をベースに解明した．

3．2000 年代以降のファッション，メディア，ストリートの現状をふまえ，ファッションの生成過程，意味内容，波及過程において，1990 年代以前と 1990 年代，1990 年代と 2000 年代との変化を整理した上で，ポスト・ファッション論の可能性を検討した．

【論文の章立て】

序　章　研究の背景と目的
第１章　ファッション理論に関する概説と検討
第２章　ファッションのエスノグラフィー
第３章　ファッションを享受する人々と社会変容
第４章　ファッション・メディアの変容
第５章　ファッション産業の変容
第６章　ファッション・ストリートの変容
第７章　ポスト・ファッション論序章
結　章　本論のまとめと今後の課題

【論文の概要】

序章では，本論文に関する全体的な問題設定として，研究背景と目的を示し，論文構成，用語の定義を記した．

第１章から第７章は，大きく分けて３つの部分からなっている．

はじめの２つの章では，ファッションに関する先行研究の概説，ファッションの定義，ファッションの理論的説明，流行論の先行研究を検討した．ここで，流行の成立と伝播に関する既存研究を整理した結果，背景となる時代，政治や社会，文化や思想の変化により，流行の定義や流行に対する位置づけが変容していることが明らかになった（第１章）．さらに，本論の研究手法の中核をなすエスノグラフィーや

路上観測学の先行研究を概説し，ファッション研究におけるエスノグラフィーのあり方を考察した．加えて，ビジュアル・エスノグラフィーの具体例を挙げ，本論文の方法論的検討を行なった(第２章)．

つぎに，第３章から第６章では，洋装の着用がひろく一般化した戦後から現在までの約60年間の，ファッションと社会の変容(第３章)，ファッションに大きな影響を及ぼすと考えられるメディアの様相(第４章)，ファッション産業のシステムの歴史的な展開(第５章)，ファッション・ストリートの変容(第６章)について，文献資料および定点観測に基づくフィールドワークから整理した．ファッション，メディア，産業，ストリートの変容を時系列でたどり，ファッション生成の構成要因や流行の伝播の仕方や範囲がどのように変化したかを考察することで，ファッションの概念変化の痕跡を明らかにした．これらを要約すると以下の通りとなる．

1940年代には，終戦後のファッション産業の復興と洋装化，洋裁学校，スタイルブックの台頭，映画やアメリカン・スタイルの流行を背景に，トレンドの受容がなされたことを整理した．

1950年代には，繊維産業のさらなる復興と発展，パリ・オートクチュール，シネモード，テレビや創刊雑誌の増加などによる，流行形成のシステムが発生したことを指摘した．他方で，ストリートファッションの萌芽としての太陽族など，族のファッションの登場を確認した．

1960年代には，オートクチュールやプレタポルテなどの影響の拡大がみられた．また，原糸メーカー・紡績，百貨店主導によるキャンペーンに触れ，ミニスカートや，アイビーの流行が上から下へトリクル・ダウンする実相を記した．

1970年代には，アパレルによる既製服の発展と，『an-an』，『non-no』等の新雑誌の影響について論じ，ヒッピーやアンノン族の台頭に言及した．

1980年代には，ＤＣブランドの出現により，ファッションの細分化が生じた例を考察した．さらに，新雑誌の創刊など，メディアの変化を考察し，合わせて竹の子族，渋カジなどのクラスターの台頭，原宿，

渋谷のファッション・エリアの成立を検証した.

1990 年代には，ファッションのカジュアル化，低年齢化，多様化，加速化が進行し，ファッション形成因子が多様化するとともに，流行伝播のプロセスが従前のトリクル・ダウンから下位の若者ファッションがトリクル・アップし，やがてトリクル・アクロスしていく実相を検証した．さらに，ファッションクラスターの細分化，ストリート系雑誌の登場，インターネットの普及等により，ファッション伝播が加速度的に増幅され，情報が双方向化し，ファッション環境が大きく変化している状況を指摘した.

2000 年代には，1990 年代の状況がさらに進展する一方，新たな局面を迎えたことを指摘した．ここでは，ファストファッションの台頭による流行の陳腐化，景気とファッションの無関連化の進展，ファッションの周期性の崩壊，ファッション・ヒエラルキーのフラット化について言及し，1990 年代との差異を明らかにした.

第三に，第 7 章では，1990 年代のファッションの画期，それに続く 2000 年代の状況から，ポスト・ファッションの可能性を検討した．具体的には，1．ポスト・ファッション化がみられる 2000 年代の状況　2．ファッションとストリートの関係の変容　3．文脈無関連化するファッション　これらに焦点を当て，「クールジャパン」の対象であるストリートファッションの背景には，従来のファッション文脈との無関連性にあることを指摘した.

最後に結章では，論文全体を総括し，今後の課題について検討を行った．本論の帰結として，ファッション・システムの自己矛盾を抱えつつあるいま，不特定多数が同時に享受するものであった流行が，自己表現のメディアとしてのファッションへ向かう現状を示唆し，ファッションの変容について新たな知見を得るに至った.

所属：共立女子短期大学生活科学科